

歩兵第九十四旅団略歴

陸軍少将 小野修

年 月 日	概 要
昭 二 〇 五 五 二 九	編成下令
六 一 〇	前支廣東省汕頭市
六 一 一	軍令陸甲才六十五号に依り才百三十師団編成下今 同日より歩兵才九十四旅団の編成に着手し
六 一 二	編成完結す、戦斗序列附表才一の如し
六 一 三	歩兵才九十四旅団編成充足人員附表才二の如り 才百三十師団主力廣東転進のため歩兵才九十四旅団は汕頭支隊となり廣東省 汕頭に在りて粵東地区の警備勤務に任す、當時に於ける軍隊区分附表才三の 如り
八 一 四	在留邦人(在郷軍人)臨時召集に依り歩兵才九十四旅団司令部及隸下歩兵大 隊に入隊す。其の人員附表才四の如し 旅団司令部編成定員充足の為隸下部隊より下士官以下を駆逐充足す、其の人 員附表才五の如し 停戦に因する詔書發布

(400)

1141

年 月 日	概	要
昭 二 九 八 八	復員下令 停戦協定成立す	
	停戦に附する詔書發布以降浦頭支隊指揮下部して前隊主力に違反不能なる 部隊中旅団司令部に隸属せし人員附表才六の如し	
	停戦協定成立す	
	独立歩兵才六二〇大隊ニヶ中隊（MGニヶ小隊含）	
	中隊長 陸軍大尉 小宮林 勲	
	中隊長 陸軍大尉 田原為幸	
	才百三十師団砲兵隊才一大隊（一中隊欠）	
	大隊長 陸軍大尉 後藤正元	
	才百三十師団工兵隊才二中隊	
	中隊長 陸軍大尉 横田正忠	
	才百三十師団輜重隊の主力（本部輜馬一中、自動車一中）	
	長 陸軍少佐 佐藤浅次郎	
	才百三十六兵站病院の一部	
	長 軍医大尉 上田定三	
	才百三十師団防疫給水部の一部	
	長 軍医大尉 工藤千木	

(101)

1142

年 月 日	概	要
	才西三十師団病馬廠の一部	
	才百三十師団兵器勤務隊の一部	
	長 梶田中尉 坂口茂照 長 技術少尉 白土勲	
	南支那派遣憲兵隊才六十隊	
	甲隊長 霧島六尉 松永平司 長 滅罪少尉 伊崎道弘	
	才二〇四野戰郵便局	
	局長 事務官 長野義二 長 陸軍軍曹 本郷正一	
	才一六一飛行場大隊汕頭派遣隊	
	長 滅罪少尉 伊崎道弘	
	才五四河空姫継隊才三分隊	
	長 陸軍軍曹 本郷正一 長 陸軍軍曹 脇坂志郎	
	才四氣象駆逐隊才二大隊才五中隊汕頭氣象隊	
	長 陸軍軍曹 脇坂志郎	
	才二三航空通信駆逐隊才四中隊才十二分隊	
	長 陸軍軍曹 佐藤光雄	
	才五航空情報駆逐隊才八中隊の二ヶ小隊	
	長 陸軍軍曹 長沼節	
	長 評定中尉 長沼節	

(102)

1143

年 月 日	総	要
庚東忌憲才十四聯隊急進隊	長 陸軍軍曹 星	忠 雄
船舶工兵才三十四聯隊才一小汕頭火發	陸軍中尉 橋 原 木 勝	
才三輪空路部廣東保安區	長 陸軍中尉 関 原 栄 増	
廣東暨綱部汕頭支隊	支隊長 陸軍中佐 山 國 誠 意	
等較に因する詔書發布以降 汕頭支隊指揮不部隊にて部隊主力に追及不能な る部隊中旅團司令部に轉籍せし人員附表才六の如り		
停戦以降転出せし人員附表才七の如り		
編成完結以降戦死戦病死 生死不明者の人員附表才八の如り		
内地帰還の為汕頭港出帆		
鹿児島港上陸 附表才九の隸下部隊及殘務整理人員を庚東及福岡縣二日市支 支那派遣軍復員本部に残置り復員を完結す		
附表才一		
戰 斗 原 列		
歩兵才九十四旅團		

(123)

1144

年月日

概

要

歩兵才九十四旅團司令部

独立歩兵才二八一大隊 大隊長 陸軍大尉 四中英二

独立歩兵才六二〇大隊 大隊長 陸軍少佐 尾居義馬

独立歩兵才六二一大隊 大隊長 陸軍大尉 村重武一

独立歩兵才六二ニ大隊 大隊長 陸軍少佐 内田馨

社 独歩六二〇ハ歩二中戦閥銃二小一六二ニの兩大隊は昭和二十年
五月十四日才百三十師團と共に廣東へ転進す

附表才三

汎頭支縣軍隊区分

歩兵才九十四旅團 旅團長 陸軍少將 小野修

歩兵才九十四旅團司令部 大隊長 陸

独立歩兵才二八一大隊 大隊長 陸軍大尉 田中英二

独立歩兵才六二一大隊 大隊長 陸軍大尉 村重武一

附表才五 六月三十日底屬人員一覽表

被 属 部 隊	区 分	下 土 官	兵
独立歩兵才二八一大隊	二	二	計
独立歩兵才六二一大隊	二九	三二	摘要
独立歩兵才六二一大隊	三一	三四	要

(104)

1145

年 月 日	概	要	詳
輸入人員の整理			
輸入年月日	被 戻 属 部 隊	才 二十三 軍司令部	才 独立歩兵才一〇〇大隊
九九九九九	八 三	鹿信才十四聯隊	"
二五二四一八	独歩才九九大隊	才一二九飛行場大隊	才一三〇師団司令部
才五航空情報聯隊	才三航空路部	才一三〇師第一野戰病院	才三〇師第一野戰病院
才一六一飛行場大隊	才二十三軍	独混才三十一聯隊	獨歩才二八一大隊
一一二	一 一 二	一	二 一
一七〇一一一	四	二一	
三四四五三八八	一	一一	五一
一三三	六		
四五二二七九九三一	一	一一	二六一

(105)

1146

年	月	日	被	轄	屬	部	隊	概
			二〇九二五	二〇九二五	二〇九二五	二〇九二五	二〇九二五	被轄屬部隊
			才三十三航空遣	才三十三航空遣	才三十三航空遣	才三十三航空遣	才三十三航空遣	南支派遣隊
			才一三六兵站病院	才一三六兵站病院	才一三六兵站病院	才一三六兵站病院	才一三六兵站病院	才一三六兵站病院
			船舶工兵三十四聯隊	船舶工兵三十四聯隊	船舶工兵三十四聯隊	船舶工兵三十四聯隊	船舶工兵三十四聯隊	船舶工兵三十四聯隊
			電信才十四聯隊	電信才十四聯隊	電信才十四聯隊	電信才十四聯隊	電信才十四聯隊	電信才十四聯隊
			才二〇四野戰郵便局	才二〇四野戰郵便局	才二〇四野戰郵便局	才二〇四野戰郵便局	才二〇四野戰郵便局	才二〇四野戰郵便局
			才一三〇師團兵務勤務隊	才一三〇師團兵務勤務隊	才一三〇師團兵務勤務隊	才一三〇師團兵務勤務隊	才一三〇師團兵務勤務隊	才一三〇師團兵務勤務隊
			才一三六兵站病院	才一三六兵站病院	才一三六兵站病院	才一三六兵站病院	才一三六兵站病院	才一三六兵站病院
			獨步才二八大隊	獨步才二八大隊	獨步才二八大隊	獨步才二八大隊	獨步才二八大隊	獨步才二八大隊
			才一三〇大隊	才一三〇大隊	才一三〇大隊	才一三〇大隊	才一三〇大隊	才一三〇大隊
			獨立輪重才十九中隊	獨立輪重才十九中隊	獨立輪重才十九中隊	獨立輪重才十九中隊	獨立輪重才十九中隊	獨立輪重才十九中隊
計								將校
	二八							准士官
	二七六							下士官
	二九九							兵
	三九九							軍屬
	四四四							計
			一三一一二一六八四一九二九三	一三一一二一六八四一九二九三	一三一一二一六八四一九二九三	一三一一二一六八四一九二九三	一三一一二一六八四一九二九三	三三五六九

106)

1147

スロダ

								年 月 日		
								附表 第7 號	轄 出人 員の整 理	總
								轄屬 年月日	轄 出人 員の整 理	要
死 亡	生 死 不 明	區 分	附表 第8 死亡 (生死不明) 着人員表	原 所 屬	階 級	氏 名	摘 要			
二 六 一 三	二 〇 一 三	二 〇 八 六	南 支 憲 兵 隊	軍 曹	中 尉	黒 木 正 司	三 三 三 二 二 判 明 中 國 側 移 換	四 一	一	一
才 三 師 團 防 疫 給 水 部	才 一 二 九 飛 行 場 大 隊	独 歩 九 九 大 隊	上 等 兵	佐 藤 虎 一	佐 藤 虎 一	沢 田 美 貴	二 九	三 四	五	兵
							三	一一	二	軍 屬
							四 三	一 三 五 一 一 一 一 二	二 八	計

(107)

1148

年 月 日	殘留部隊一覽表					
	概要					
	独立歩兵才六二。大隊(ニヶ中隊機銃三ヶ小隊欠)					
事由	註：右ニヶ大隊は才百三十肺團主力と共に中華民國廣東省大良に在り					
附表才九、其の二	大隊長 陸軍少佐 尾尻義馬					
本 籍	柱 所	苗 守 担当者	統 制	氏 名	年 月 日	年 月 日
總島県美馬郡勝助北庄	市助任時門	妻小野栄	大正九年正月廿五日	尾松修	昭和二年正月廿五日	昭和二年正月廿五日
大分県南部仁野村	大分県南海郡佐伯助	夫小野栄	大正九年正月廿五日	尾松修	昭和二年正月廿五日	昭和二年正月廿五日
同上	久	久	大正九年正月廿五日	尾松修	昭和二年正月廿五日	昭和二年正月廿五日
妻	久	久	大正九年正月廿五日	尾松修	昭和二年正月廿五日	昭和二年正月廿五日
糸平靜子	小野栄	小野栄	大正九年正月廿五日	尾松修	昭和二年正月廿五日	昭和二年正月廿五日
昭和十二年正月廿五日	大正九年正月廿五日	大正九年正月廿五日	大正九年正月廿五日	尾松修	昭和二年正月廿五日	昭和二年正月廿五日
昭和十二年正月廿五日	大正九年正月廿五日	大正九年正月廿五日	大正九年正月廿五日	尾松修	昭和二年正月廿五日	昭和二年正月廿五日
21.現歩准	20.8.20.予歩大尉	20.6.1.現少將	20.5.1.現少將	小野修	明治三十一年正月廿五日	明治三十一年正月廿五日
糸平今朝夫	糸平今朝夫	糸平今朝夫	糸平今朝夫	糸平今朝夫	糸平今朝夫	糸平今朝夫

(108)

1149

年 月 日	備考	概要	要
		右の外駐地廣東省出發に先立ち昭和二十一年二月二十四日憲兵大尉 松永平司中西側により、残業を命ぜらる。	

(109)

1150

歩兵第九十四旅団司令部の一部略歴

年 月 日	概	要
昭二一一三一	小頭支隊琉球籍軍屬集結のため折田義忠以下五五名、歩兵才九十四旅団司令部に転属す。	
二一四	先発を命ぜられ駆逐艦旗竹に乗船	
二一五	汎環港を出港す。	
二一九	鹿児島港上陸	
二二一	同日五三名除隊名解せり 輸送指揮官独歩才六二〇大隊附 陸軍大尉 畑川秀勝 将校四名 下士官一一名 兵三七名 軍属三名 計五五名 残務整理者 陸軍鍛医大尉 折田義忠 陸軍曹長 新垣良純 九州連絡所剣着	(110)

第百三十師團獨立歩兵才二八一大隊略歴

陸軍大尉

田中英二

英二

年
月
日

概

要

昭二〇五年五月二十日

綱成完結
軍令陸甲才六十五号に上り師団編成下令
才百三十師団編成完結 同日独立歩兵才二八一大隊

立 蔡木營 潮陽縣 潮陽附近警備

臨時召集により汎頃在郷軍人將校以下五十七名入隊

右入隊者現地召集解除

集結のため揚蕩出港

廣東省潮陽縣潮陽に集結

移動のため潮陽出発 同日同縣砂捕に集結

沙捕出港 同日廣東省汕頭市礫石に集結

内地帰還のため汕頭港出発

鹿児島上陸

大隊本部一(六十九名) 一般中隊四(一九八名)
機関銃中隊一(一七九名) 步兵砲中隊一(一大九名)

通信隊一(九十三名)

(111)

1152

年 月 日		概		要	
締成当時兵力	部隊長以下一三〇二名	現地内訳	帰属者一〇四七名	現地召集解除者	一〇二名
入院患者	九一名	生死不明者	一名	転属者	九四名
死亡者	二四名	(一三〇二名中には現地召集者將校) (以下五七名を含まず)			
該務整理者					
氏名	本籍地	同上	住居相当者	同上	妻
田中英二	京都府船井郡	同上	同上	田中すみ子	氏名
國武忠人	郡町字大村	同上	同上	久	姓
田野三四七	熊本県上益城郡 中島村大字	四八	同上	國武嘉熊	姓

(012)

1153

第三十師団独立歩兵第六百二十大隊略歴

陸軍少佐 尾 犀 義 鳥

年 月 日

概

要

昭二〇、一、一。

陸軍機密才十三号に依り独立歩兵才三大隊仮編成下令

一一四

鹿児島に於て編成完結

一一五

鹿児島出港、門司港——釜山——支那——山海关——上海経由汕頭上陸

三、七

汕頭上陸

三、八

粵東地区の警備

五、二〇

軍令陸甲才六十五号臨時編成に依り独立歩兵才六百二十大隊編成（粵東）

八、一三

粵東附近警備

八、一四

停戦詔書發布（広東省興徳縣太良）

八、一七

復員下令（同 右）

昭二一、三、二六

廣東省東莞縣虎門出港内地帰還

四、三

浦賀港上陸

部隊編成（兵力）

本部、通信隊、歩四中、機関銃一中、歩兵砲一中

復員完結時に於ける兵力区分

主力、本部通信隊、才一中隊、才三中隊、機関銃中隊（二小隊欠）

(13)

1154

年月日

概

要

歩兵砲中隊は硫黄島太良より浦賀に上陸（四月三日）

一部　才ニ中隊（機関銃一小隊）は油島より鹿児島に上陸（三月二日）

死亡者　六十五名

生死不明者　一名

入院患者　百八名

戦傷者（重症なる人員）

才一独立警備隊

二名

才五〇兵站警備隊

八名

玄末寇兵隊

四名

独歩一九大隊

二名

独歩九七大隊

二名

独歩六二二大隊

二名

独歩九一大隊

二名

才百六十一師団

一名

独混十九旅団司令部

六三名

油頭支隊

八六名

(114)

1155

独立歩兵第六二〇大隊第四中隊略歴

陸軍大尉 小官林

勤

年
月
日

概

要

昭二〇、一、一五

陸軍機密才十三号に成り大陸新設部隊要員として、歩兵才四十五駆隊補充隊に於て独立混成才十九旅團獨立歩兵才六二〇大隊才四中隊候編成

五、二〇

單令陸甲才六五号に依り師団編成下令
独立歩兵才六二〇大隊才四中隊候成完結

同日大隊主力広東転進の際當中隊は仙頭へ残置され才九四旅團長の指揮下に入る

昭二〇、一、二二

門司港出帆 同日釜山港上陸

上海着

仙頭港上陸

粵東地区警備並に陣地構築於潮陽縣署石

停戦詔書發布

復員下令

潮陽縣陽江容

年	月	日	概要	摘要
昭 二〇 一一 一〇 一一			湖陽縣達據收容 乘船のため湖陽駕泊頭 に移動	總員 二五二名 市政 五三名 陸路輸送員 五名
一一一 一一四 一一五 一一九			内地帰還のため乗船 汕頭港出帆 鹿児島港上陸	事故内訳
			百九十六名除隊 召集解除 残務整理者二名残置 残務整理者 陸軍大尉 小官 林 勤 陸軍伍長 松 永 光 行	入院 九名 駕屬 八名 死亡 六名
			大隊長主力の状況 尾尾義尚少佐以下約千名は広東にて待期 しあり、汕頭にありたる 全部戦名あり、入院患者九名一分肉紙書類は整備りあり 全部戦名あり、死亡者六名 但し、入院患者の事実証明書は百三十六病病の到着を待ち あり、死始動肉係は復本死係に預託しあり	現地召集解除者十名 現地召集解除者十名 （軍事委員会調査課別表） （軍事委員会調査課別表） （軍事委員会調査課別表） （軍事委員会調査課別表）

(116)

1157

第百三十師団歩兵第九十四旅団独立歩兵六二〇大隊略歴

陸軍少佐 尾 尻 義 馬

年月日

概

要

昭二〇五五

軍令陸軍第六五号に依り編成下令

昭二〇五二

広東省恵來縣沙隨にて部隊主力と分離
編成完結

五三

広東省潮陽縣潮陽附近警備並にせ号

九五
一九六

戰備 入院一名（西直順、二〇五五於汕頭）

五五

廣東省潮陽縣福善村並警備並にせ号戰備

入院六名（安田豊吉、二〇七六於汕頭、南松義、二〇七九於汕頭、下田代要、二〇七九

於汕頭、伊福香鄉、二〇七五於汕頭、小國龜太郎、二〇八七於汕頭、橋本徳美、二〇八九

於汕頭）

生死不明一名（現地召來者今川秀男、二〇八九、於廣東省潮陽縣南溪附近、第九
四旅團司令部勤務中の二と）
広東省潮陽縣達濠に移動集中（武裝解除）
達濠に於ける収容所生活

朝鮮籍四名の中國側に移管（安村武雄、金田正道、関東丸、安田信次）

二〇一二三於汕頭）其後内地帰還

(111)

年	月	日	概要	摘要
			沖縄大島郡籍九名を第十九四旅団司令部に転属 （山山七郎、鶴村武家、主島茂八、入口英二、岸田竹千代、大月松雄、森喜一、鳥越健松、伊佐川松次郎）	總員一八七名の内訳
昭二	二二四	三、三一	於汕頭、 才九四旅団司令部に転属（龜次政治三三、四於汕頭）	將校五名
二二五	二二二	汕頭港にて乗船	准士官一名	
二二五	二二一	汕頭港出帆	兵一四三名	
		鹿児島上陸、 帰還人員總員一八七名	八名	
		同日鹿児島高島屋にて被員式举行し帰郷 (内二名は残務整理の後帰郷)		

(18)

1159

独立歩兵第六百二十一一大隊略歴

陸軍大尉 村重武一

年月日 構

要

1160

昭二〇、五、五	軍令陸甲才六十五号により才百三十師団編成下令	陸軍大尉 村重武一
同日より独立歩兵才六百二十一一大隊の編成に着手す	同日より独立歩兵才六百二十一一大隊の編成に着手す	
八五、二〇、五、二〇	汕頭市にて編成完結す	
九一、一〇、二、二	大隊主力を以て汕頭市砲石東地構築作業実施一部ハ約一ヶ中隊機関銃一ヶ小隊を以て汕頭市東方ニ吉金砂陣地の構築実施八月十四日以後中止	
二二、一、二	大隊主力を潮陽に移動せりめらる	
二二、一、二	大隊主力を更に達濠に移動せしめられ各一ヶ中隊宛廟に集結し兼中港生活並に自活の為工作をなす	
達濠河川浚渫作業を実施す		
入院患者其の他汕頭患者才百三十六兵站病院より香港に輸送せられたる者十五名才百三十師団歩兵才九十四旅團砲石患者療養所より内地リ帰還鹿児島国立病院に収容せられたる者二十七名		

(119)

第百三十師団独立歩兵第六百二十二大隊略歴

陸軍大佐 内田

馨

年月日

概要

要

摘要

要

昭二〇五五	軍令陸甲才六十五号に依り才百三十師団編成下令	死亡者 六一名
二一三九二二一四	広東省恵州に於て独立歩兵才六百二十二大隊編成完結	生死不明者 三名
二一八一四二七	広東地区の警備	入院患者 一〇七名
二一三二六四三	廣東省順徳縣大良集中營に集結	駆逐者 一〇一名
二一三二六四五	廣東省東莞縣虎門寨出帆	
神奈川県浦賀港上陸	復員下令（広東省黄捕）	
複員式挙行（神奈川県浦賀）	信戦詔書発布（広東省黄捕）	
大隊長陸軍少佐内田馨以下一〇三五名除隊名無解隊す	大隊全員 広東省順徳縣大良より浦賀に上陸復員す	
本部 通信隊 歩四中 MG 一中 IA 一中（一一四八）	復員完結時に於ける兵力区分	
部隊編成（兵力）	大隊全員 広東省順徳縣大良より浦賀に上陸復員す	

(120)

1161

第百三十師団砲兵隊略歴

陸軍大佐 宇宿達二

年月日

概

昭二〇、一、六

陸亞機密才十三号に依り仮編 汕師團臨時編成下令され左記部隊の仮編を行

いたリ

要

仮編以前部隊名	編成担任部隊名	編成完了日	内地発月日	出発地	外地到着日	到着地
山砲兵聯隊本部	野砲大補充隊	二〇、一、四	二〇、一、三	門司港	二〇、一、三〇	上海閔
才一山砲兵大隊	同 右	同 右	同 右	同 右	同 右	同 右
才二山砲兵大隊	野砲五六補充隊	同 右	同 右	同 右	同 右	同 右
山砲兵中隊	山砲五五補充隊	同 右	同 右	同 右	同 右	同 右
山砲兵段列中隊	野砲五補充隊	二〇、一、五	同 右	同 右	同 右	同 右
			同 右	同 右	同 右	同 右
			同 右	同 右	同 右	同 右
			同 右	同 右	同 右	同 右

山海閔通還 及

汕頭上陸の時を以て夫々独立混成才十九旅団に転属す

軍令陸甲才六十五号に拵り独立混成才十九旅団反陸亞機密才十三号に拠る仮編部隊を以て才百三十師団臨時編成(編成改正)を令せられ

(121)

1162

							年	月	日
							摘要		
							要		
合計	(主) 軍 人	(副) 醫 務	(衛 生 部 門)	技 術	兵 科	兵種	階級	編成部隊名	編成地
1					1	中佐		才百三十師團砲兵隊力編成迄完結す	
10		2	1		7	大尉		砲兵隊本部	新編汕師團山砲兵聯隊本部
18		2	4		12	中尉		才一大隊	獨立混成才尤旅團砲兵隊
38	1	1	2		34	少尉		才二大隊	山砲兵中隊及山砲兵段列中隊
13	3	2	2		6	見習官		才三大隊	新編汕師團才二山砲兵大隊
18		1			15	准尉			
20		2	1	2	15	曹長			
98	2	4	3	2	27	軍曹			
104	5	6	3	3	87	伍長			
327	1		2		324	兵長			
788			9		979	上等兵			
903			15		888	一等兵			
150					150	二等兵			
286	12	20	42	7	2805	合計			
							摘要		

編成完結日 に於ける編成表及裝備

編成表

摘要

要

(22)

年 月 日

概

要

備考一 関係書類焼却のため各本部 大中隊毎の明細なる数字不明

二 火砲 約六〇〇頭

三 其他車輛器物等數量不明

部隊の行動概要

停戦迄

停戦後				部隊名	自 至 云 云 二 九 五	部隊本部	自 至 云 云 二 九 五	警備	部隊名	自 至 云 云 二 九 五	警備	部隊本部	自 至 云 云 二 九 五	警備	部隊名	自 至 云 云 二 九 五	警備	部隊本部	自 至 云 云 二 九 五	警備	部隊名	自 至 云 云 二 九 五	警備	
步 三 大 隊	步 二 大 隊	步 一大 隊(第 三 隊)	砲 兵 隊 本 部 (合 成)	省 東 廣	云 大 陸 海 岸 地	粵 東 廣	粵 東 廣	粵 東 地 區	粵 東 地 區	粵 東 地 區	粵 東 地 區													
同	右	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右
七 沙 尾 東	七 沙 頭 東	七 沙 尾 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東	七 沙 頭 東		
左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左
底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	底 泥 島	

(123)

年 月 日		概要						
		被戦完結日に於ける人戻の概況						
部隊名	除隊召解数	死残数		入院数	入院内 医送数		残尚者	計
		死	残		死	残		
第一大隊(空挺部隊)	内地五三一	三七	一四	一二	一一	一	五八二	
砲兵隊本部(拿撃手隊)	内地一七六六							
第二大大隊	現地四五	八七	一〇九	五二	二			
第三大大隊				五				
合 計	二三四二	一二四	一二三	六四	二	五	二〇一四	

備考
編成完結後 他部隊隸屬確定者九〇名

1124

1165

第百三十師団砲兵隊第一大隊略歴

陸軍大尉 後藤正元

年月日

概

要

昭二〇五年二月

編成完了

汕頭地区警備反陣地構築

兵器軍需品の移譲業務

外砂礫地区を経て潮東地区に於て集中營生活を営

汕頭港に於て特別輸送船搭、雄叫に分乗

大隊長以下五十三名同港出帆

鹿児島港入港、同日五十三名上陸残務整理の為後藤大尉佐藤中尉元田少尉暫

喪を残し以下全員同日復員す。

人員の内訳

尉官 庫官 下士官 兵 計

内 地 除 隊 (參 謀 部 編 入 者)	内 地 除 隊 (參 謀 部 編 入 者)	現 地 除 隊 (參 謀 部 編 入 者)	入 院	転 属	死 亡 者	合 計
一五			二			一三
六						六
一八六			二	六		二七五
四〇七			三	七	一	三八
六一四		一三	三五	一八	二	五三一
						下土官一、兵六八三三三、支隊主力と共に 鹿児島に上陸同日除隊す
						朝鮮出身者兵「九」を含む
						歩九四旅團(井上海)載所元不詳
						尉官二名は折田大尉西村中尉下士官一名

(125)

1166

第百三十師団工兵隊略歴

陸軍大尉 小形研二

年
月
日

昭
二
一
二
一
三
五
一
六
二
六
反
二
月
三
日
反
二
月
五
日
門
司
出
帆

概

独立混成才十九旅団工兵中隊の勤員下令せられ

広島に於て編成完結

反二月二十六日反二月五日門司出帆

広東省汕頭に上陸セリ

之より先独立混成才十九旅団工兵隊へ長陸軍大尉小形研三は汕頭にありて附近の警備反対未軽備強化の諸作業に任りありしが
独立混成才十九旅団命令により独立混成才十九旅団工兵中隊へ長陸軍大尉横田正忠（）を併せ、尚他部隊より將校以下約一六。名の駆逐を受け才百三十師団工兵隊を仮編成せり、編成概要左の如レ

才百三十師団	工兵隊長	陸軍大尉	小形研三
	副官	陸軍大尉	次賀國男
才一中隊長		陸軍大尉	松尾健吉
才二中隊長		陸軍大尉	横田正忠
才三中隊長		陸軍大尉	吉永武雄
通信小隊	欠		

年	月	日	概要
昭	三	一	機械兵器の搬入充実完備もありりも器械は中隊器械二ヶ中隊分を三分せるに温ぎず 惡は全隊にて二五 を保有せり
昭	五	五	右板編成を以て行動中
昭	五	二	軍令陸甲才六五号に依り才百三十師団編成下令
			編成を完結す
五	八		師団工兵隊板編成以来部隊は広東省汕頭にありて築城及教育等に精励しありしが五月上旬師団は一部を汕頭支隊として汕頭に残置し主力は広西南方地区に移駐することなりたるを以て 部隊は才二中隊(長横田大尉)を汕頭支隊長(小野大佐)の指揮に属せりめ
八	一		汕頭附近を出發 路行軍に依り広東西南方地区轟進 五月下旬より六月上旬に至る間に才一中隊主力は中山附近 部隊主力は江門附近に到着 警備及築城等に任ぜリ
八	一	八	八月上旬部隊本部及才三中隊は更に番禺縣沙灣に後駐せり
九	二	八	停戦協定締結
十	三	九	広東省順徳縣大良に集結

(UR)

年	月	日	概	要
昭二一	三	二二	帰還の為大良出港	
三	二六	三	帰還の為広東省虎門出帆	
四	三	四	浦賀上陸	
五			復員式完了	
昭二二	一	一	汕頭支隊配屬才ニ中隊の行動 引続シ紫城反教育に猶励す	
八	一四	八	停戦詔書発布	
九	一八	九	復員下令	
九	二	九	停戦協定締結	
二	一七	二	帰還の為汕頭出帆	
二	二〇	二	鹿児島上陸 同日復員式	

(128)

1169

第百三十師団工兵隊第二中隊略歴

陸軍大尉 穂田正志

年月日

概要

昭二一、一、一五

広島工兵才五聯隊補充隊にて独立才十九旅團工兵隊候編成

内司港出發

広東省澄海縣汕頭上陸

軍令陸甲才六五号に依り才百三十聯隊編成下令

才百三十聯隊工兵隊編成完結

才百三十聯隊工兵隊才二十隊編成

奥東地区警備並陣地構築作業

汕頭に於て移動並接收準備

澄海縣外沙に收容

汕頭港出帆(二十五名)

鹿児島上陸

同日一七二名除隊召集解隊 残務整理二名

年月日	概要
昭二一、一、一五	広島工兵才五聯隊補充隊にて独立才十九旅團工兵隊候編成
昭二一、一、一六	内司港出發
昭二一、五、五	広東省澄海縣汕頭上陸
昭二一、五、五	軍令陸甲才六五号に依り才百三十聯隊編成下令
昭二一、五、五	才百三十聯隊工兵隊編成完結
昭二一、五、五	才百三十聯隊工兵隊才二十隊編成
昭二一、五、五	奥東地区警備並陣地構築作業
昭二一、五、五	汕頭に於て移動並接收準備
昭二一、五、五	澄海縣外沙に收容
昭二一、五、五	汕頭港出帆(二十五名)
昭二一、五、五	鹿児島上陸
昭二一、七、二	同日一七二名除隊召集解隊 残務整理二名

(229)

1170

第百三十師団通信隊略歴

陸軍大尉 喜原長利

年月日

昭二〇五年二月

概

二中隊及本部

中華民國広東に於て編成完結

本部

一二名

第一中隊

一四五名

計三〇一名

内入院者 一五名

一四四名

広東に於て編成完結直ちに同省新會縣北街に進駐爾後該地に於て通信勤務中
同地に於て終戦となる。

内地帰還のため 広東省営德縣大良出発

昭二〇五年二月二二

広東省東莞縣虎門座に於て乗船

三、二五
三、二六
四、三

浦賀に上陸す

(130)

1171

第一百三十師団輪重隊略歴

陸軍少佐 佐瀬茂次郎

年月日 摘要

昭二〇五年五月一〇

軍令陸甲才六十五号に依り才三十師団輪重隊編成下令

広東省潮陽縣福善村下於才百三十師団輪重隊編成完結

本部・駆馬二ヶ中隊・自動車一ヶ中隊を編成す。

才百三十師団主力広東方面転進に方リ輪重隊附陸軍大尉竹田有節を長に輪重隊の一部兵力（竹田大尉以下三〇二名）を以て當時輪重隊を編成し五月十日以降師団直轄となり 师団主力と共に広東方面に転進せり 同隊は停戦後引続

き師団主力と共に広東方面に転進せり 同隊は停戦後引続

き師団主力と共に広東方面に転進せり 同隊は停戦後引続

き

目下広東省大良に在リ

輪重隊主力は五月十日以降歩兵九一四旅團長を指揮下に入リ汕頭附近に位置す

輪重隊主力は広東省汕頭附近に在りて師団転進に伴ラ軍需品を三耳リ陸路
汕頭より広東省惠來縣発潭墟まで 海路は塊地の「シヤンク」を借用し汕頭
より廣東省汕尾まで輸送を実施セリ

輪重隊主力は汕頭附近に在りて同地附近の警備並に輸送業務に從事セリ
停戦協定に基き兵力を汕頭市署右に集中反軍需品の処理並に中國側の要求に

(191)

1172

年 月 日	概 要
昭二十二二六 三三	甚く道路補修に従事す 海防艦オ一四号により油頭出帆 鹿児島港に上陸せり
入院患者 内訳	十七名
生死不明者 内訳	三名
昭和二十年八月五日 昭和三十年三月十四日	同、油頭患者療養所百三十六兵站病院より鹿児島並 に香港に輸送せられたるもの十二名及昭和二十年自九月十四日(壬午年)同才百 三十師団歩兵オ九十四旅團磨石磨石患者療養所より内地に運送鹿児島國立 病院に収容せられたるもの五名 同、広東省患者療養所域に於て軍需品輸送途中中国官艦 に捕われたるもの二名

(432)

1173

第百三十師団輪重隊第一中隊略歴

陸軍大尉 竹田有節

年
月
日

概

要

昭二〇一	一一一	五三一	昭和二十年一月六日陸亞機密才十三号に依り独立混成才十九旅團輪重隊編成の向汕頭附近に在りて粵東地区の警備に從事
五五二	一一一	五六二	軍令陸甲才六五号に依り才百三十師団編成下令
二二三	一一一	二二二	編成完結
三二三	一一一	三二三	汕頭より廣東地区へ転進の為師団主力と共に陸路行軍に依り轍進、此の陳年隊区分に依り才百三十師団臨時輪重隊を編成す
三二三	一一一	三二三	の間、廣東省新会縣望村に在りて廣東地区警備に從事
三二三	一一一	三二三	復員の為病時輪重隊の編成を解き才百三十師団輪重隊才一中隊を編成
三二三	一一一	三二三	船重隊の主力は一月十五日汕頭出帆、一月二十日底恩島港上陸、佐瀬少佐以下名復員申送昌博に依り准認
三二三	一一一	三二三	廣東(七沙尾)出帆
三二三	一一一	三二三	陸軍大尉(本邦中隊長)以下二五九名異狀なし
三二三	一一一	三二三	鹿児島港上陸、同日大尉広瀬忠男以下二五七名復員夫々異狀なく帰省
三二三	一一一	三二三	陸軍大尉竹田有節、陸軍曹長宇佐原辰夫は二日市に三月三十一日着

(133)

1174

年、月 日	概要
	残苗者よりて残務整理に任す
	編成
	下士官校
	一一名
	兵
	二四名
	許
	二四名
	二五九名
	(内二名残務整理者)
	要

(134)

1175

第百三十師団兵器勤務隊略歴

陸軍大尉 勝 丸 等

年月日

概

要

昭二十九年一月六日陸軍機密才十三号に依り独立混成才十九旅団兵器勤務隊

編成

の同、汕頭附近に在りて粵東地区の警備並兵器勤務に從事

軍令陸甲才六十五号に依り才百三十師団編成下令

編成完結　ハ才百三十師団兵器勤務隊編成完結

汕頭より廣東地区へ転進の為師団主力と共に陸路行軍に依り転進

廣東省新會縣江門に在りて廣東地区警備並兵器勤務に從事

の間、廣東省曇縣大良に在りて集中營生活実施

廣東（七沙尾）出帆、陸軍大尉（本駆隊長）以下六十七名異状なし

鹿児島港上陸同日陸軍准尉荒木英夫以下六十五名復員完結、夫々異状なく帰

省

陸軍大尉歲丸等、陸軍軍曹白井米秋は福岡県筑紫郡二日市に到着、殘務整理

者よりて殘苗殘務整理に任す、

異状なく殘務完了帰省

(135)

1176

		年	月	日
		編	成	
兵	將 下士官 兵	扶 一二名 五四名	一名 六七名 （内残務整理者二名を含む）	概
				要

1177

第三十師團第一野戰病院略歴

年月日	概要
昭二、五月二十日	中華民國廣東に於て編成完結
五、二〇	廣東附近に於て編成直に主力は同省中山縣中山に進駐一部は新會縣北街附近に進駐該地附近の警備並野戰病院開設業務に從事中終戦となる。
八、一四	終戦後直ちに主力は一部を中山に残置り、順德縣容奇附近に移動
八、中旬	北街並中山の各一部は次々主力に合し同縣倫教に集結爾後同地並羊額(倫教西北三斜)に野戰病院を開設り患者の收療並復員準備をなす。
昭二、三一八	内地帰還の為、集結地倫教出港乗船地たる虎門塞附近に前进
三、二一	同地(七沙尾)に於て乘船
三、二九	浦賀港に到着
四、一	上陸する
復員式舉行	復員式舉行
復員完結	復員完結

1377

1178.

第百三十師團病馬廠略歷

陸軍鐵道大尉 藤本範雄

年 月 日

概

要

昭二十六年八月一五日	陸軍機密才十三号下令に依り騎兵才六聯隊補充隊に於て独立混成才十九旅團病馬廠恢復成
一九三五年二月二七日	熊本に於て編成完結
一九三五年二月二七日	内司港出發、釜山——安東——山海關——上海経由汕頭上陸
一九三五年二月二七日	汕頭上陸
一九三五年五月八日	潮安縣沙溪頭に在りて粵頃地区の警備並病馬廠開設
一九三五年五月二十日	軍令陸甲才六十五号に依り才百三十師團時編成下令
一九三五年五月二十日	移駐のため汕頭出發
一九三五年六月一日	才百三十師團編成完結
一九三五年六月一四日	廣東省新會縣篁村着病馬廠開設
一九三五年六月一五日	移駐のため篁村出發
一九三五年六月一七日	復員下令
一九三五年八月二十四日	廣東省番禺縣岐頭着
一九三五年九月二日	停戰協定締結

年	月	日	要																											
昭二〇・〇・七 一〇・八 二二三二六 五			撤																											
内地帰還のため広東省虎門寨港出帆			移駐のため岐頭出發																											
広東省順徳県大良着			内地帰還のため広東省順徳県大良着																											
後員式終了																														
<table border="1"> <thead> <tr> <th>總員</th> <th></th> <th></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>五五</td> <td>内地除隊</td> <td>召募解除</td> </tr> <tr> <td>五五</td> <td>現地除隊</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ナシ</td> <td>死亡</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ナシ</td> <td>生死不明</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ナシ</td> <td>入院</td> <td></td> </tr> <tr> <td>三</td> <td>歿屬</td> <td></td> </tr> <tr> <td>一五</td> <td>摘</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>要</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>			總員			五五	内地除隊	召募解除	五五	現地除隊		ナシ	死亡		ナシ	生死不明		ナシ	入院		三	歿屬		一五	摘			要		
總員																														
五五	内地除隊	召募解除																												
五五	現地除隊																													
ナシ	死亡																													
ナシ	生死不明																													
ナシ	入院																													
三	歿屬																													
一五	摘																													
	要																													

残務整理者二名は内地除隊召募解除の人員に含めあり

U400

1180

第百三十師団防疫給水部略歴

陸軍軍医大医 猪 原 貞

年月日	概	要
昭二〇、一、六 五、五	軍令陸甲才一三号に依り大陸新設部隊編成下令 同日編成下令 同日編成着手	軍令陸甲才六五号に依り才百零師団恢復成下令
昭二〇、三、七 四、五 五、五	元獨立混成才十九旅團及大陸新設部隊要員を以て編成完結す より恢復成才十九旅團防疫給水部（兵力約二三〇名）は廣東省澄海県汕頭市にありて防疫給水業務に從事す	軍令陸甲才一三号に依り大陸新設部隊編成下令 同日編成下令 同日編成着手
五、五 六、一 九、二 二、三、八 三、二三 三、三十	頃恢復成才百三十師団主力廣東附近移駐のため 駐地出発（分遣班三十七名を汕頭支隊に残置す）海豐惠州及廣東を経て 廣東省新會県江内着 同地に在りて防疫給水業務を実施す（兵力百五八名） 停戦協定締結と共に駐地出発 廣東省順徳県大良に集結す 内地帰還のため駐地出発 廣東（七沙尾）出帆 鹿児島上陸 同日復員完結す	元獨立混成才十九旅團及大陸新設部隊要員を以て編成完結す より恢復成才十九旅團防疫給水部（兵力約二三〇名）は廣東省澄海県汕頭市にありて防疫給水業務に從事す

年月日	概要
	<p>内地帰還人員 部長陸軍軍医大尉猪原貞以下一五一 名 除隊召集解除者 薬剤大尉飛騨秀忠以下一四八名</p> <p>(在更一〇名松合志)</p> <p>上陸時入院 痘生伍長 中田 清 (病名 頭部擦過創)</p> <p>入院患者 衛生兵長 中村成旗以下四名</p> <p>残務整理者 部長軍医大尉 猪原 貞以下二名</p>

(442)

1182

独立混成第二十三旅団司令部略歴

陸軍少将 下河辺 駿二
陸軍少佐 岡谷 新作

年月日

概

代監

陸軍少佐

岡

谷

新

作

要

昭和八年三月

軍令陸甲才五号に依り台湾台北に於て編成せられ其の編成定員は旅団長以下

一四六名なりりも

海南島三亞に於て將校以下約七五名（暗号手二十五名、逕運勤務要員五十名）

増加配属を受く。

台灣に於て編成完結するや

高雄港出發、香港に於て作戦に與する陸海協定を締めたる後

二一六 雷州東側海岸に奇襲上陸後行進中に北上遂溪附近の夏夷を確保し

二二〇 広州湾佛羅磨地に平穩進駐を実施其後 金橋に位置し雷州半島の要域を確保

治安維持に任ず

より相撲作戦参加の為先ず麻江附近の急襲之に殲滅的打撃を与えたる後一旦

駐地に帰還

九、八 再び行動発起隸下部隊を數掃團に分ちて北上開始黎村墟黎縣を経て斗竹平南を屠り転じて桂平を占領、蒙圩附近の要地を確保し軍主力の進出を掩護しありたる所才四戰区派兵全火力の反撃をうけ惡戦苦斗遂に之を西方に率退引続此の敗敵を急追

年	月	日	概要
昭五二三	一	三	貴県を占領す 貴県占領後は軍の左側背を掩護りつつ北進
二一四	二	四	墳末廢附近に集結同地に於て南寧占領の軍命令を受け
二一大	三	四	墳行動を開始 處く南寧に挺進
三二四	三	四	該地を占領セリ 南寧占領後幾何もなく雷州半島後帰の軍命をうけ
三四四	三	四	該地出港欲集合浦北海を経て
三二八	三	八	雷州半島旧營廈地 金橋に帰還せり
此の頃米機動部隊の行動活発にして南支那海に侵入し海南島の状況急迫せる に鑑み軍の要旨命令に基き			
六	一	一	半島南端白沙港より渡港開始 同月末には全兵力（雷州半島歩二大残置の渡航完了 直ちに所在海軍側の協同して各要地を占領確保し専ら米軍の上陸に備えたり 然るに之が準備未だ完からざるに海南島撤収・軍命に按し行動開始海口より反転渡航し一旦雷州半島に集結 諸準備の整えたる後歩二大を雷州半島に残置して雷州友隊となる
六二七	一	七	主力は行動開始 化県——梅菉——水東——覽白——陽江——恩平——江門
八一三	八	三	を経て粵東地区に転進
八一五	八	五	佛山（広東西南方約二〇斜）
八一六	八	六	終戦の大詔を拜受す
終戦の大詔受の後軍命令により 佛山出发			

(444)

年	月	日	概要
昭	二	九	同日夜半広東方面約十四粧中山大學に集結せり、然るに其の後中國才ニ方面軍より新に日本軍の集結の位置を指示せられ
	一	六	河南基立村に移動直ちに中國軍による武装解除を受けり
	二	三。	更に移動を命ぜられ河南東方約八粧尉村集中營に移動集結せり
	三	六	閔村集中營集結後は専ら復員業務に専念すると共に將兵の保健及復員後に於ける就職等を顧慮り各種職業教育及各種競技等を実施し且空地を利用する野球栽培に努力し只管に帰國の日を待てり
昭	三	二	中國側に派遣せる協力者は、全員撤収を完了
	四	五	夜半 集中營出發
	四	六	新埠中國出發に方り賊犯容疑者として旅團長及佐官名を中國側に拘留せられたるは甚だ遺憾にりて一日も帰國の速からんことを祈念しあり。

045)

1185

独立歩兵第百二十八大隊略歴

陸軍中佐 谷村靜夫
陸軍少佐 福嶋忠弘

年月日

概

要

九 七	二 一 六	二 一 五	二 一 六	二 一 八	二 一 九	二 一 七
遂溪県城に兵力を集結、湘桂作戦の為移動を開始再び廉江県城を攻撃引続さ	駐留地を分離、専ら行軍教練に従事	附近の要衝馬頭嶺附近に在りたる第百五十五師第百六十三師團に大打撃を与	木明雷州東岸に奇襲上陸一拳に雷州半島の要衝を落し広州湾に進駐、附近に在りて陣地構築警備に従事	編成完了後に於て、台北水滸、高雄に兵力を集結次期行動を準備す。	編成完了後直ちに独立混成第十三旅團長波少將の指揮下に入る	軍令陸軍才五号に依り全鶏軍司令官編成管理官となり、台灣歩兵才一聯隊補充隊長編成担任となり、大專司部充當に於て編成に着手
遂溪県城に兵力を集結、湘桂作戦の為移動を開始再び廉江県城を攻撃引続さ	駐留地を分離、専ら行軍教練に従事	附近の要衝馬頭嶺附近に在りたる第百五十五師第百六十三師團に大打撃を与	木明雷州東岸に奇襲上陸一拳に雷州半島の要衝を落し広州湾に進駐、附近に在りて陣地構築警備に従事	編成完了後直ちに独立混成第十三旅團長波少將の指揮下に入る	編成完了後直ちに独立混成第十三旅團長波少將の指揮下に入る	軍令陸軍才五号に依り全鶏軍司令官編成管理官となり、台灣歩兵才一聯隊補充隊長編成担任となり、大專司部充當に於て編成に着手
遂溪県城に兵力を集結、湘桂作戦の為移動を開始再び廉江県城を攻撃引続さ	駐留地を分離、専ら行軍教練に従事	附近の要衝馬頭嶺附近に在りたる第百五十五師第百六十三師團に大打撃を与	木明雷州東岸に奇襲上陸一拳に雷州半島の要衝を落し広州湾に進駐、附近に在りて陣地構築警備に従事	編成完了後直ちに独立混成第十三旅團長波少將の指揮下に入る	編成完了後直ちに独立混成第十三旅團長波少將の指揮下に入る	軍令陸軍才五号に依り全鶏軍司令官編成管理官となり、台灣歩兵才一聯隊補充隊長編成担任となり、大專司部充當に於て編成に着手
遂溪県城に兵力を集結、湘桂作戦の為移動を開始再び廉江県城を攻撃引続さ	駐留地を分離、専ら行軍教練に従事	附近の要衝馬頭嶺附近に在りたる第百五十五師第百六十三師團に大打撃を与	木明雷州東岸に奇襲上陸一拳に雷州半島の要衝を落し広州湾に進駐、附近に在りて陣地構築警備に従事	編成完了後直ちに独立混成第十三旅團長波少將の指揮下に入る	編成完了後直ちに独立混成第十三旅團長波少將の指揮下に入る	軍令陸軍才五号に依り全鶏軍司令官編成管理官となり、台灣歩兵才一聯隊補充隊長編成担任となり、大專司部充當に於て編成に着手

(446)

1186

年	月	日	概要
昭二〇	一	下旬	軍命令に基き先づ台山に向い前進す。途中広東省中桐城附近に於て前進目標たる台山県を容県に変更され直ちに鮮を襲じ容県を攻略引続き丹竹—桂平—貴県—東瀆—賓陽—南寧等広西省の各要衝を脅し
三一五	六	二九	純兵团は同地出発。雷州半島転進の命を受け才百二十八大隊は兵团の才一梯団となり南寧—欽州—合浦—北海—青平—廉江等邕道の討伐掃蕩を実施し
七二八	八	一五	安鋪附近に進出。大隊は同地に在りて警備を命ぜられたる才其の後兵团主力の海南島転進の為大隊は、溪附近に移駐を命ぜられ主力を集結次期行動を準備す。
			雷州半島南端徐聞縣附近に移駐を命ぜられ雷州文隊に屬し(独歩七。大隊長村岡中佐指揮)兵团主力との連絡並に附近の肅正工作に從事す。
			廣東地区転進の命を受けるや同日兵团主力に復帰
			転進を開始金化県—雷州—陽江—恩平—新會—九江各主要地附近一帯を掃蕩宣撫しつ
			南海県佛山市に到着爾後廣東市河南附近に兵力の集結教育訓練中
			終戦となる。爾来集中營生活に後行。此の間兵卒被服其の他軍需諸資材を中心側に交付り武装解除を実施す。爾後専ら集中營に在りて軍紀風紀の緊縮。

(144)

年	月	日	概要
昭二一四	五		保健 現地自活作業に従事する傍ラ復員業務を続行す。
六			乗船地糾結のため衆中營へ若駒駆し出港
六一三			新埠に兵力を集中待期す。偶々換度の結果「コリシ」陽性（菌保）数名を出し為に兵团王力と分離の止むなきに到り
六二十一			オ百二十九師団司令部と共にリリセ九号（オ二十一番）に乗船同日出港
五三			浦賀に入港
浦賀上陸			船内「コリシ」発生のため久里浜接護所に隔離せられ専ら防護に専念する傍ら復員業務に従事す。
復員完結時に於ける兵力区分			
昭和二十一年五月二十二日復員式時に於ける兵力区分左の如し			
昭和二十一年六月十一日復員完結			
入院			
死	七		
死	一六二		
死	一八		
不明			
不明			
廻			
廻			
残留（現地二）			
残留（現地二）			
残務整理者官氏名			

(148)

1188

年 月 日	概	要
	大隊長 陸軍少佐 須島忠弘 書記 陸軍准尉 宮崎六郎	
其の他特異事項		

当大隊は台湾に於て編成したる関係上召集者の大部分は台湾港寄港者且つ官吏多く復員に方り家族の内地引揚等の都合と其の住所明かならず依て職業就職等に甚大なる影響を來し相当生活上に懸念せらるものあり。渡華以来海上輸送の如くならず内地より再三補充を受けたるもの何れも輸送途中敵潜水艦の攻撃に遭い前後二回（現役補充）共悉く不幸未着に終り在隊者の大部分は編成当時並に現地召集の補充兵にりて年令比較的多め又一部の現地（海南島）召集者は素質良好と謂い難い。

(142)

1189